

## CA1634 ■■■■■ 「システムズライブラリアン」の位置づけをめぐる

### はじめに

システムズライブラリアン (systems librarian) に関する論考を、日本でも近年よく見かけるようになった。図書館における多くの業務が情報システムに依存する現在、システムズライブラリアンの業務は重要なものとされている。しかし、「図書館における専門的職種としての位置づけ」については極めて曖昧である。システムズライブラリアンは、システム担当者や他のライブラリアンとどう違うのか？ システムズライブラリアンになるためには、何をどう学べばよいのだろうか？

本稿では、3つのブログ記事を基に、システムズライブラリアンの位置づけを考える。

### システムズライブラリアンとは？

インガーソル (Patricia Ingersoll) とカルショー (John Culshaw) による “Managing Information Technology”<sup>(1)</sup> は、システムズライブラリアン向けの実用的な手引書である。(1)計画、(2)スタッフ配置と指揮系統、(3)コミュニケーション、(4)組織間連携、(5)開発、(6)サービスとサポート、(7)研修、(8)日常及び定期的な運用、(9)施設、(10)調査と最新技術の10章に加え、技術と高等教育に関するトレンドの要旨、45ページのフォーマット例から成り立っている。

この手引書によると実際には、図書館の規模に加え、採用する側の意図や働く側の意識によって「システムズライブラリアン」の定義は大きく異なっている、という。「図書館で初めてコンピュータが使われて以来、システムズライブラリアンがコンピュータのエキスパートであるべきか、それとも図書館のことを理解したコンピュータのエキスパートであるべきか、多くの議論がされてきた」<sup>(2)</sup> であり、それは現在でも続いている。そもそも「カタログガー」「レファレンスライブラリアン」等の呼称が広く認知されている欧米の図書館業界において、「システムズライブラリアン」という呼称さえ定まったものではない。フッテ (Margaret Foote) は1997年の段階で、システム担当者の募集時の職種名が “Systems librarian” 以外にも多くあることを指摘している<sup>(3)</sup> が、現在でも “Information Systems Coordinator”, “Library System Director” 等、さまざまである。

では、システムズライブラリアンの定義付けについ

て、具体的な意見を見ていきたい。

### その1：雇う立場から

ジョージ・メイソン大学のサロ (Dorothea Salo) は、図書館における意思決定者 (library decisionmakers) のためのブログ “TechEssence.Info” の著者の1人である。

2006年9月に投稿された記事 “Hiring a systems librarian”<sup>(4)</sup> で、「本物のシステムズライブラリアンは稀少な存在であり、見つけることも雇うことも難しい。さらに、雇う側が『こうであるべき』と思うようなシステムズライブラリアンではない可能性がある。」とした上で、雇う側が考慮すべきポイントを列挙している。その筆頭では、次のように述べている。

#### ・被雇用者の主な仕事は何か？

システムズライブラリアンに求めている仕事の90%がハードウェアやソフトウェアのトラブル対応であるならば、MLS (図書館情報学修士) を無駄にしていることになります。代わりにコンピュータ技術者を雇いましょう。そうではなく、データベースの仕事やウェブページのデザインとともに、メタデータを扱ったり、助成金申請の書類を書いたり、マネジメントをしたり、レファレンスも求めるのであれば、システムズライブラリアンが適任でしょう。

### その2：学ぶ立場から

マコーリ (Jennifer Macaulay) は、大学図書館のシステムズライブラリアンであり、またサザン・コネチカット州立大学でMLSを取得するために学ぶ学生でもある。

マコーリ自身のブログ “Life as I Know It” に、同じく2006年9月に投稿された記事 “What Does It Mean To Feel Like A Librarian?”<sup>(5)</sup> では、MLSのカリキュラムとマコーリが望むものの違いを述べている。

MLSの学校は、レファレンスと調査が大部分を占めるような、ライブラリアンシップに関するいくつかの教義や原則に中心を置いています。それが重要でない、とか、MLSの学生はすべてそのような原則に触れるべきではない、と言いたいものではありません。しかし、今のMLSのカリキュラムがシステムズライブラリアンにとって最良のものである、とは必ずしも思わないのです。(中略) 極端なことを言うと、ほとんどのライブラリアンにとって、自

分がライブラリアンであると実感するのは、利用者のためにレファレンスや調査の仕事をしているときではないだろうかと思えます。私はそんなことをしないし、しようとも思わないし、したくもありません。Ariel（訳注：文献伝送システム）の設定や管理、また ILL 自動化システムのために Coldfusion（訳注：インターネットアプリケーション作成ソフト）の設定を終えたときに、ライブラリアンであると実感している人がいるなんて、聞いたことはあるでしょうか？自分がライブラリアンであると思うことが重要なのでしょうか？（中略）自分がライブラリアンであると心から思うことなんて、私には決して無いのではないかと思うのです。それが良いことか悪いことか、私にはわからないけれど。

### その3：これから学ぼうとする立場から

2006年10月、オーストラリアの図書館員有志が共同で作るブログ“librariesinteract.info”に、“What exactly makes a systems librarian?”<sup>(6)</sup>と題する記事が投稿された。記事の著者であるウォリス（Corey Wallis；ハンドルネーム techexplorer）の悩みは、現在システムズライブラリアンとして働いているが、これから大学院で図書館学を学ぶべきか、それともシステム構築を学ぶべきか、というものであり、次のように述べている。

レファレンスや調査、コレクション構築を学ぶことが、業務の上で役に立つかどうか自信はありません。その一方で、単に司書資格がないという理由だけで、図書館部門での昇進から排除されたくはありません。

また、マコーリの意見に賛同する一方、サロの記事を引用した上で、「自分自身がこうであるべきだと思うシステムズライブラリアンになるために、どの専攻が役立つか、ということが問題なのだ」と述べている。

この記事に対してサロは、「技術とデスクワークを兼ねたハイブリッドな業務も少なくない。それに加えて、（少なくともアメリカの）図書館では、司書資格に対するこだわりがかなり強い」として、司書資格を取ることを勧めるコメントを付けている。

### 意見の比較

3者の記事を比べると、「システムズライブラリアンとは何か」という、根本的な位置づけに対する考え

方の差が大きいことがわかる。

サロの主張の通り、システムだけを担当するのであれば、システムズライブラリアンを充てる必要はない。アメリカやオーストラリアでは制度的にライブラリアンとライブラリーテクニシャンを明確に区別している<sup>(7)(8)</sup>。システムズライブラリアンに期待されているのは、情報システムと図書館の業務を同じ俎上で論じることである。

しかし、図書館利用者のニーズを把握するための目録やレファレンスに関する知識を重視しすぎる余りに、システムズライブラリアンを育てる環境がないというのは問題である。技術が日々複雑になる中で、情報システムに関する知識や経験を日々アップデートしつつ、その他の業務をこなすことはかなり困難であると想像できる。特に、情報システムに係る部署を自前で持っている大学図書館であれば、情報技術についてシステムズライブラリアンに求められる能力のレベルは高い。ここで興味深いのは、日本に比べて明らかに「システムズライブラリアン」の認知度が高いであろうアメリカやオーストラリアにおいても、システムズライブラリアンを育てるための教育課程が未だ整備されていないということである。三輪によると、1999年の段階で「システム・ライブラリアンを育成するための整ったカリキュラムは未だない」（CA1289参照）。その後のWeb 2.0あるいはLibrary 2.0（CA1624参照）と呼ばれる情報技術の速い進歩に、システムズライブラリアンを養成するためのカリキュラム作成が追いつかず、その結果としてマコーリやウォリスのような不満が発生していると考えられる。これについて日本では、宇陀が述べているように<sup>(9)</sup>、筑波大学において2007年度に学群の再編が行われており<sup>(10)</sup>、今後の動向が注目される。

### さいごに

ウォリスは2006年11月、自らのブログに、「この講座が、図書館と技術の世界を結びつけるだけではなく、自分が図書館における技術をより理解するためのものであって欲しいと願う」と書き、システム構築について学ぶことを表明した<sup>(11)</sup>。この選択を、皆さんはどう考えるだろうか？

（調査及び立法考査局文教科学技術課：<sup>さわだ だいすけ</sup>澤田大祐）

(1) Ingersoll, Patricia et al. Managing Information Technology: A Handbook for Systems Librarians. Westport, Libraries Unlimited, 2004, 199p.

(2) Ingersoll, Patricia et al. Managing Information Technology:

- A Handbook for Systems Librarians. Westport, Libraries Unlimited, 2004, p. 25.
- (3) Foote, Margaret. The Systems Librarian in U.S. Academic Libraries: A Survey of Announcements from "College & Research Libraries News," 1990-1994. College & Research Libraries. 1997, 58(6), p. 517-526.
- (4) Salo, Dorothea. "Hiring a systems librarian". TechEssence. Info. 2006-09-15. <http://techessence.info/node/71>, (accessed 2007-07-30).
- (5) Macaulay, Jennifer. "What Does It Mean To Feel Like A Librarian?". Life as I Know It. 2006-09-27. <http://scruffynerf.wordpress.com/2006/09/27/what-does-it-mean-to-feel-like-a-librarian/>, (accessed 2007-07-30).
- (6) techexplorer. "What exactly makes a systems librarian?". librariesinteract.info. 2006-10-09. <http://librariesinteract.info/2006/10/09/what-exactly-makes-a-systems-librarian/>, (accessed 2007-07-30).
- (7) 金容媛. "主要国の司書養成教育および資格・司書職制度の現況：韓国、米国、英国を中心に". 第5回これからの図書館の在り方検討協力者会議. 2007-01-30, 文部科学省. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shougai/tosho/shiryu/07062107/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/shiryu/07062107/001.htm), (参照 2007-07-30).
- (8) Australian Library and Information Association. "Qualifications". ALIANet. <http://www.alia.org.au/education/qualifications/index.html>, (accessed 2007-07-30).
- (9) 宇陀則彦. 特集, システムライブラリアン育成計画：システムライブラリアンをめぐる状況と課題. 情報の科学と技術. 2006, 56(4), p.150-154.
- (10) 筑波大学. "学群・学類の改組 (平成 19 年 4 月)". 筑波大学大学案内. <http://www.tsukuba.ac.jp/admission/reorganization/index.html>, (参照 2007-07-30).
- (11) techexplorer. "Being the bridge between two worlds". Tech Explorer. 2006-11-18. <http://techexplorer.com/2006/11/18/being-the-bridge-between-two-worlds/>, (accessed 2007-07-30)

Ref: 田邊稔. 特集, イケてる情報サービスプロフェッショナルを目指して!, システムライブラリアンの現状と今後：イケてる図書館員を目指して. 情報の科学と技術. 2001, 51(4), p.213-220.

中尾康朗, 永井善一. 特集, システムライブラリアン育成計画：サービス指向環境下におけるシステムライブラリアンの役割とスキル. 情報の科学と技術. 2006, 56(4), p. 155-160.

## CA1635

### 韓国の図書館関連法規の最新動向

#### はじめに

2006 年は韓国の図書館界の歴史に大きな里程碑として残るものと思われる。1 つは 8 月の IFLA ソウル大会 (E546, CA1609, CA1610, CA1611 参照) の大成功であり、もう 1 つは 9 月の図書館法改正である。さらに大きな動きとして、図書館や読書問題に関心を持つ市民団体やマスメディアの積極的な活動がある。例えば 2000 年度から行われている、民間テレビ局と市民団体「本を読む社会作り国民運動 (Citizen Action for Reading Culture)」の読書推進活動、「奇跡の図書館 (Miracle Library)」, 「小さな図書館 (Small Library)」などの全国的なプログラムと、朝鮮日報

の「リビングを書斎に」運動など主要新聞社が推進している読書キャンペーンである。このような市民中心の活発な活動は、読書、公共図書館、特に児童図書館環境に関する社会認識の画期的変化に大きく貢献した。韓国図書館協会を始めとする図書館団体も主管・協力団体として参加し、その効果は大きい。こうした動きは地方自治体の図書館設立と発展に対する関心を触発し、国・民間の財政投資拡大により、多くの図書館が設立された。

また、各図書館は国民に対するサービス強化の一環として、開館時間を延長するなど自ら努力している。2006 年 11 月から国立中央図書館は夜間・週末 (平日は午後 11 時、土・日曜も午後 6 時まで) 開館を実施し、全国 16 の市・道の地域代表図書館も延長開館を実施している。文化観光部は夜間開館拡大運営の成果を評価し、2007 年からは全国規模に拡大する予定である。これにより新しい雇用機会を創出し、国民の文化施設利用を積極的に支援する方針がある。

このような図書館分野における社会・市民の運動、法律の整備および国際的な成功は、知識情報基盤社会において良いサービスを期待している国民に対し、図書館が新しい図書館文化を創り出し、新しい社会的役割を担うための図書館改革を試みる重要なチャンスであるとして、その主役である図書館界の使命感と熱意が高まっている。

#### 新「図書館法」の概要

韓国における図書館情報に関連する主な法律としては、図書館および読書振興法 (1994 年) (CA1018 参照)、個人情報保護法 (1994 年)、情報化促進基本法 (1995 年)、情報公開法 (1996 年)、記録物管理法 (1999 年)、平生教育法 (生涯学習法, 1999 年)、知識情報資源管理法 (2000 年) などがあるが、ここでは、2006 年に制定された図書館法の成立経緯、主要内容、推進方向について概観する。

2006 年 9 月、2005 年 6 月に国会に提出された「図書館および読書振興法の全面改定に関する法律案」(E376, E429, CA1578 参照) が本会議で修正可決され、10 月 4 日に公布された。この改正法の基本原則は図書館法と読書振興法を分けることである。新「図書館法」は図書館に関する基本法としての性格を明確にし、国民の情報アクセス権と知る権利を保障するために、図書館の社会的責任と役割を明示している。総則 (第 1 章)、図書館政策樹立および推進体制 (第 2 章)、国立中央図書館 (第 3 章)、公共図書館 (第